＜栃木地域＞

■思川（おもいがわ）にまつわる話

昔、思川（おもいがわ）の近くに若夫婦が住んでいたが、妻は病気になってしまったので、夫は皆の寝静（ねしず）まったころ、毎晩、神社に行き、お百度（ひゃくど）参（まい）りをした。しかし、この妻は、「寝たきりの私がいやになって、よその女のところに行くに違いない。」と邪推（じゃすい）した。

夫のしてくれたことを知った妻は、疑ったことを悔（く）やんだが、ある晩、月明かりの川面（かわも）に映った自分の姿を見ると、なんと大蛇（だいじゃ）になっていた。そして、自分の醜（みにく）い心と姿を恥じた妻は、川に身を投げた。

それ以来、その川のほとりを若い女性が通ると、大蛇（だいじゃ）が現れて食ってしまうというので、年に一度、村の娘を人身御供（ひとみごくう）として、大蛇（だいじゃ）に差し出していたが、ある年、五万長者の娘にその順番が回ってきた。

いよいよ、人身御供を捧（ささ）げる日。この地に来ていた親鸞聖人（しんらんしょうにん）は、大蛇（だいじゃ）が現れると、南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）と書いたお札を投げつけ、一所懸命祈祷（きとう）を始めると、大蛇（だいじゃ）は苦しみ、もがき始め、天に昇っていってしまった。

すると、間もなく、天から蓮華(れんげ)の花がたくさん落ちてきた。そこに建てたのが蓮華(れんげ)寺である。また、妻が姿を写した川が姿川(すがたがわ)で、身を投げた川が思川(おもいがわ)とも伝えられている。